

日本先史・古代竪穴住居の構築材の年代測定による住居構築年の検討

Study on Residential Construction Ages
from Dating Building Materials in Japan's Prehistoric Pit Houses

小林謙一

KOBAYASHI Ken'ichi

- ① 研究の目的と経緯
- ② 事例検討
- ③ 比較と考察
- ④ まとめと課題

[論文要旨]

縄紋時代・弥生時代・古墳時代・古代（北海道では続縄紋・擦文文化期）における居住活動は、主に竪穴住居と呼ばれる半地下式の住居施設が用いられている。竪穴住居施設は、考古学的調査によって、主に下部構造（地面に掘り込まれた部分）が把握され、その構造や使用状況が検討されている。竪穴住居は、a 構築地点の選定と設計から構築（掘込みと付属施設の設置）→ b 使用（居住・調理・飲食などの生活）→ c 施設のメンテナンス（維持管理と補修・改修・改築）→ d 廃棄→ e 埋没（自然埋没・埋め戻し）の順をたどる。それぞれの行為に伴う痕跡が遺構として残されており、その時間的変遷はライフサイクルと整理される。ライフサイクルのそれぞれの分節が、どのくらいの時間経過であったかは、先史時代人の居住システム・生業・社会組織の復元に大きな意味を持つ。その一端として、ライフサイクル分節ごとにその程度の時間経過があったかを、出土試料の年代測定から推定したい。

住居のライフサイクルのどの分節を測定するのかを把握していることが肝要であり、そのためには測定する試料に対する、セツルメントとしてのライフサイクルの位置を整理して把握することが重要である。今回はライフサイクルの分節 a としての住居構築に関わる測定研究を、主として被熱住居の構築材に関する年代測定を中心に検討した。

その結果、縄紋時代の被熱住居と古代の被熱住居の構築材の測定において、前者では5事例中4事例（参考事例を合わせると21事例中17事例）がほぼ同一の伐採年かつ想定される住居の帰属時期に近い年代が得られたのに対し、後者では古代では2事例ともまたは参考事例を加えた弥生から古代では10事例中6事例において一部に古い測定値を示す試料が認められ、古材の再利用例があったと考えられる。

対応するライフサイクルの分析を考古学的に検討しつつ、多数の測定結果を蓄積・検討することで、住居自体の耐用年数・居住年数、その土地（セツルメント）に対する定着度（数百年の長期にわたる定住から数年程度の短期的な居住、季節的居住地移動を繰り返すなど）、背景となっている生業（採集狩猟・管理栽培や焼畑などの半農耕・灌漑型水田などの農耕）や社会組織（集落規模、階級など）の復元につながる。

課題として、試料自体の帰属や性格（後世の混入や攪乱を含む）、遺構自体の技術・素材の問題（コールタールや獣油などを塗布する可能性）についても検討する必要があるし、第一に、同一遺構内で出土層位が明確など由来を追跡できるような、考古学的な文脈の明らかな試料を多数測定していく必要がある。

【キーワード】 縄紋時代、炭素14年代、竪穴住居